

# オゾン療法研究 ニュース

統合医療の発展にむけて

コロナ規制が少し緩和されたら、3年ぶりの北海道神宮例祭の出店現場は大混雑、あわてて、交通規制になったとか。各地もそれぞれの活気を取り戻しつつでしょうか。しかしコロナの油断は禁物です。このニュース作成関係者の中からこの6月、コロナ感染者発生！皆様、十分に気を付けましょう。

第11号の筆者は「一般財団法人 さくら健康財団の櫻井正太郎(元星薬科大学教授)先生」です。知る人ぞ知る「オゾン化オリーブ油」について聞きました。このものは医薬品ではありませんので、使用約束を遵守するとの書面を交わした方のみ(有)オゾノサンが斡旋しております。さあ！どういふものか教えてもらいましょう！

## オゾン化オリーブ油には劇的な効果！

オゾン化油はオリーブ油やヒマワリ油などの植物油にオゾンと酸素の混合ガスを長時間吹き込んで調製されるものです。ヨーロッパでは古くから副作用の少ない外表疾患治療薬として使用されており、すでに1859年頃から臨床応用の報告が見られるようになりました<sup>1)</sup>。日本では、獣医師の故緒方篤哉博士が、牛における壊死を伴う化膿性皮膚炎や自壊創の治療に、オゾン療法の一環としてオゾン化オリーブ油を適用した結果、著効であったという例を報告し<sup>2)</sup>、その後のオゾン療法の普及、発展に大きく貢献されました。ヒトへの臨床適用例は、1998年松本らによって手術後の瘻孔の治療に難渋していた患者に適用され、1日おきに6回塗布することで治癒した症例が国内で最初に報告されています(症例1)<sup>3)</sup>。その時のオゾン化オリーブ油はドイツからの輸入品で、オゾン化オリーブ油の即効性には目を見張るものがあり、松本医師の驚きとともに他の疾患への適用拡大へと繋がりました。現在、我が国では反応量一定の製品純度の高いオゾン化オリーブ油が製造・頒布されています。以下に代表的な症例<sup>4)</sup>を紹介しましょう。

### 症例1 鼠径ヘルニア術後創感染・瘻孔形成の治療

患者は、男性、1934年生。60歳のとき脳梗塞既往歴あり。平成9年7月、ヘルニア根治術施行。術後の経過は良好でしたが、6か月後の、平成10年1月10日、「手術した部位に膿が溜まった」という症状で外来受診。受診時、縫合部位が紫色に変色し、出血様の様子を示しており、表皮下に空洞があったため約15cm切開したところ、底部に壊死状組織を認めました。イソジンゲル、込めガーゼ処置を施行しました。施行3日後、不良肉芽のデブリードメン施行後、エレースC軟膏を塗布しました。その後、瘻孔が形成され、少量の排膿が継続するようになったため、ほぼ毎日、約3

カ月間、イソジンゲルあるいはゲンタシン軟膏、込めガーゼ処置を施行しました。4月4日からは30%硝酸銀液0.3mlを2回注入・洗浄を行い、その後43日間で13回、硝酸銀液0.5mlによる洗浄を継続しましたが、膿の排泄はほとんど無くなったものの、瘻孔はT字型の細い形状をしており、依然として塞がらず、治療に難渋した難治性のものでした。そこで、治療開始4カ月10日後の5月19日よりオゾン化オリーブ油による治療を開始しました。方法は、オゾン化油を室温に戻し、瘻孔内に約0.3ml注入後、表面はガーゼで覆うのみです。5月29日までの10日間、ほぼ隔日で6回注入しました。その結果、瘻孔は徐々に縮小し、施行から12日後の5月31日、瘻孔が閉鎖しました。その後は経過観察となり、受診から5カ月13日後(オゾン化油による治療開始35日後)の6月23日治癒しました。

左外鼠径ヘルニア術後の創感染・瘻孔形成のため、従来の治療法に反応せず、治療に難渋した難治性の瘻孔に対して、オゾン化オリーブ油の隔日6回の注入治療により治癒に至ったもので、初めてオゾン化オリーブ油による治療で瘻孔に早い閉鎖が得られたことから、その後、他の疾患の治療に繋がった画期的症例です。



オゾン化油治療前

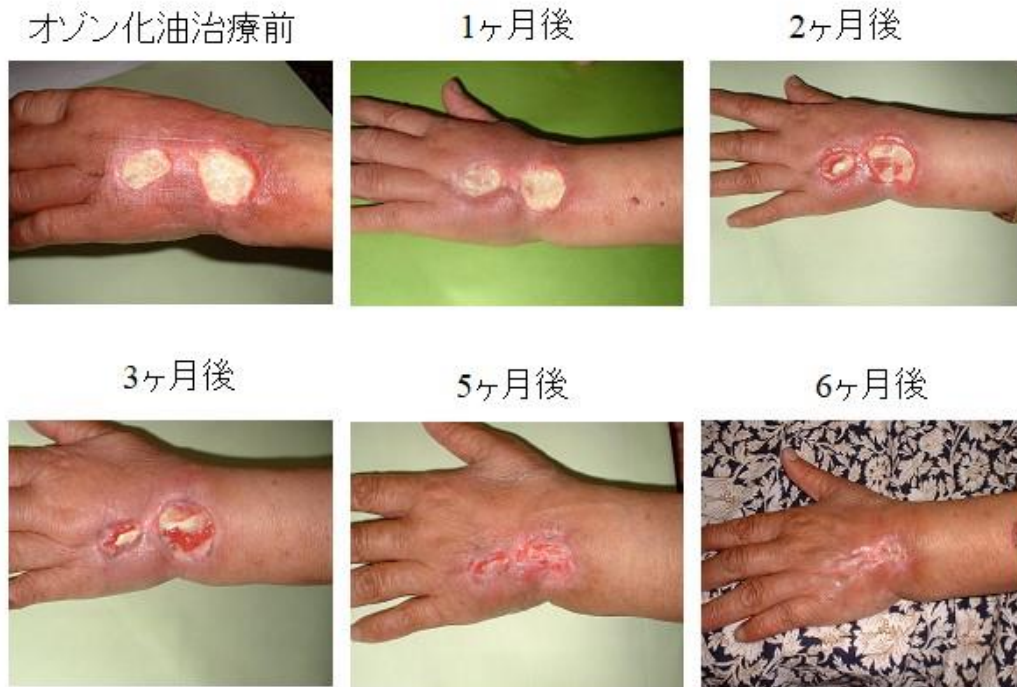
オゾン化油6回治療後

## 症例 2 抗がん薬漏出による皮膚潰瘍例

被験者は看護師です。仕事時に抗がん薬漏出により、手の甲に2箇所、直径約3.4cmと直径約2cm大の難治性の深い皮膚潰瘍ができてしまいました。アクトシン軟膏、オルセノン軟膏など従来の治療を行いましたが、肉芽形成不良で治療に難渋したため、整形外科を受診。はかばかしくないので2カ月後にはオゾン化オリーブ油による治療を開始。20日間塗布後、ピリピリ感の刺激痛を訴えたため、塗布前にキシロカインゼリー塗布を提案し、10分後洗浄し、オゾン化オリーブ油を塗布したところ、痛みもなく塗布することが出来ました。25日後、周辺に肉芽形成が始まり、28日後から、キシロカインゼリーの塗布も必要なく、肉芽の形成も良好な傾向を示してきました。ほぼ隔日でオゾン化油を投与しましたが、35日後、潰瘍部周囲に糜爛が認められたため、オゾン化油の投与を一時中止し、オルセノン軟膏、アクトシン軟膏に変更し、この治療を約1ヶ月間継続しました。臍上の肉芽の形成が遅れたため、オゾン化オリーブ油塗布中止後25日目からオゾン化オリーブ油による治療を再開しました。さらに約2ヶ月間、投与を継続した結果、肉芽が徐々に形成され、上皮化が進み、6月10日(受診から5カ月22日後)、オゾン化オリーブ油の投与を終了しました。従来法で治癒できなかった皮膚潰瘍がオゾン化オリーブ油使用期間のべ3ヶ月で経過観察となり、治癒とな

りました。治療終了となったのは発症後 9 カ月 2 週間。当初よりオゾン化オリーブ油を使用していればもっと早く治癒していたと考えられます。

治療法を簡潔に復唱すれば、開始時に刺激痛を訴えたため、キシロカインゼリーによる局所麻酔後、オゾン化油を約 3ml 塗布し、表面はガーゼにて覆う形で続けました。



オゾン化オリーブ油は瘻孔、褥瘡、皮膚潰瘍、痔瘻、膿瘍、腫瘍、下肢潰瘍、真菌感染症、歯肉炎、単純ヘルペス、外陰部膣炎、骨髄炎など難治性疾患の治療に迅速で優れた効果を発揮します。さらに内服による投与でも消化管障害、ヘリコバクターピロリの除菌などが報告されており<sup>1)</sup>、幅広い適用の可能性が広がっています。すでにその本体の構造<sup>5)</sup>、その治癒機構の解明<sup>6)</sup>も続いており、今後、医療関係者はもとより、一般にも認知度を高め、社会的に広く普及を図る必要があると考えられます。

最初で述べたようにこの優れたものの普及について、まず、市民が良く知る事、声をあげることによって、行政を変えていくことも必要と考えられます。医薬品として承認されるには、莫大な費用と時間が掛かり、このままでは有益性が犠牲になっているとも言えるでしょう。

- 1) 櫻井正太郎:オゾン化植物油の殺菌作用と臨床応用、医療・環境オゾン研究、24:25-32(2017).
- 2) 緒方篤哉:牛獣医療へのオゾンの適用とその臨床応用に関する研究。博士論文(酪農学園大学、2006).
- 3) 松本日洋、櫻井正太郎、神力就子、鈴木 滋、三浦敏明:外科手術後の難治瘻孔・難治創に対するオゾン化オイルの治療効果:日本臨床外科学会誌、61:1383-1389(2000).
- 4) 日本医療・環境オゾン研究会会報 増刊4号 2009年10月.
- 5) 三浦敏明、岩井敦史、尾崎博道、板橋 豊:オゾン化オリーブ油の成分分析、医療・環境オゾン研究、26:104-115(2019).
- 6) 神力就子、上村晋一、大澤満雄、田口 徹、中室克彦、三浦敏明:入門オゾン療法、オゾン療法研究第4号((有)オゾノサン・ジャパン、2015).